あって、読者に必要な服従の姿勢が求められる前にたっぷり展開されているとしても、このような理性の行使はただ人間的な真理にかかわるにすぎない。

人間的真理、もっと厳密には学問的真理は推理を介して精神へと語りかける。宗教的真理は「快適さ(アグレマン)」によって心情へ意志へと語りかける。しかし、パスカルにとってこのような区別は単に規範としての価値しかない。かれの認めるところによると、現実にはわれわれはただ推理のはたらきによってのみ説き伏せられるわけではない。理性の活動のみに服すべきことがらの場合においてさえもそうである。「われわれに手の届く真理」に意志の介入は免れず、結局「快適さ(アグレマン)」に服することになるのである。

> 精神と心情は真理が魂に受け入れられる門のようなものであるが、精神を通って入ることはほとんどなく、それどころか理性と相談もせずに、意志の向こう見ずな気まぐれによって群れをなして魂に導き入れられるとわたしが言うのはこのような真理についてである。

推理の論理的な力強さにのみ敏感であるべきときに、快適さによって説き伏せられるというこの態度が正しくないとしても、これがもっとも一般的であることを認めねばならない。弁証論者はこのことを考えに入れねばなるまい。『パンセ』の研究から得られる、このように微妙で独創的なレトリックの全体は次のようにしか説明できない。なによりもまず文体によって、パスカルは読者から意志の同意を引き出そうとするのである、と。

説得を成功させる手段について熟考したパスカルは、ついでその認識論的考察を一連の心理分析によって補完し、ひとつの体系を形作るにいたった。その最初のアウトラインはすでに『説得術』に述べられている。魂は主として精神と心情とから成る。精神は推理能力として定義される。この能力によって「自然で、みんなが知っている真理から出発して、一連の演繹的手法を経て真理を確立することができる。」精神が理性に対応するのと同様に、心情は意志と結びついている。意志の原動力は「幸福になりたいというようなみんなに共通の自然な欲望」である。パスカルは意志がいかにして説得手段たりうるかを説明する。

> あることがらが魂のこの上なく好むことへと魂を導くことが知らされるやいなや、魂が喜び勇んでそこへ赴くことは避けられない。

したがって、説得術というのは真理と快楽との間がきちんとつりあっているようなやり方でことがらを提示することである。真理を示すだけでは不十分である。さらに真理を好ましく見せるようなやり方で示す必要がある。自分の方法を定義した『パンセ』の断章のひとつでかれ自ら明言しているように、パスカルがその弁証論中で活用しようとしているのはこのような原理なのである。

> まず、宗教は決して理性と矛盾しないことを示し、むしろ尊ぶべきものとしてそれに対する尊敬の念を起こさせねばならない。
>
> 次いで、それを好ましいものにし、善良な人々に宗教が真実であってほしいと願わせたのち、それが真実であることを示すべきである。(L12)

『説得術』以来、パスカルはこの企てが困難であることを言いつづけてきた。気に入るためには「快楽原理」に依る必要がある。しかしこれ以上気まぐれなものはない。「快楽原理は人によってすべて異なり、各個人においてもかくもさまざまに変化するため、さまざまな時の自分自身ほど他と異なる人はいないほどである。」宗教の教えはしばしば、快楽や幸福の追求とは正反対のことのように見えるため、宗教を信じることがこんなにも難しいのである。

> われわれはほとんど自分の気に入ることしか信じない。そのため、われわれの快楽とは正反対のキリスト教の真理を受け入れないという現今の事態が生じる。「われわれに快いことを言ってくれ。そうすればわれわれもあなたの言うことを聴こう。」とユダヤ人たちはモーセに繰りかえし言った。あたかも快適さ(アグレマン)が信仰の基準となるべきででもあるかのように。

したがって弁証論者は読者の精神に語りかけるだけで満足すべきではなく、その心情を動かす必要もあるだろう。